イタリアよいとこ

旅券（パスポート）は俳句

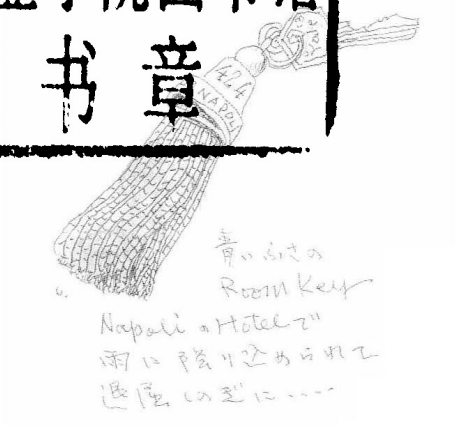
江國 滋

新潮社

イタリアよいとこ

江國 滋

不工业学院图书馆
藏 书 章



新潮社

イタリアよいとこ　旅券（パスポート）は俳句（はいく）
一九九六年一二月二〇日　発行
著者　江國（えくに）　滋（しげる）

発行者　佐藤隆信
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一　振替〇〇一四〇-五-八〇八
編集部〇三(三二六六)五四一一・読者係〇三(三二六六)五一一一

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社
© Shigeru Ekuni 1996, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN4-10-303213-8　C0095

¥1262　価格はカバーに表示してあります。

イタリアよいとこ・目　次

眼福記 7
画伯のサイン 25
手遅れの夜 41
カンツォーネの定食 57
ナポリを見て死ねない 75
君子豹変 93

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ヴェルミチェリ・ボッタルガ　111
プッチーニだらけ　129
オモチャーショック　147
ゴンドラの歌　165
最後の晩餐　179
あとがき　196

装画・本文カット／江國滋
装幀／新潮社装幀室

イタリアよいとこ

――旅券（パスポート）は俳句――

眼福記

1

イタリアに来ている。

昨夜八時半、ローマ郊外のレオナルド・ダ・ヴィンチ空港に降り立ったときの気温は十七度、ターミナルを出たとたん、頬をなぶった夜風がさわやかだった。五月（一九九三年）上旬の、いちばんいい季節なので、たのしみである。

イタリアには、これまで三回出掛けている。三回とも、ローマを中心に、せいぜいフィレンツェ、ミラノあたりまで足をのばした程度だから、ただ「出掛けた」というだけの話であって、ナポリも知らないし、ヴェネツィア（ヴェニス）も知らない。

「ナポリを見て死ね」ということばがある。

『ヴェニスに死す』という映画があった。

どちらにも行っていない以上、私は、死ぬこともできない。ということは、両方に行ってし

まったら、あとは死ぬだけか、という考え方も成り立つ。今回は、ナポリにも行く、ヴェネツィアにも行く。行ってしまえば、あとがない……。

「ねえ、そう思わないか」

「思いませんよ、そんなこと」

風来君が一笑にふす感じで、にべもなく答えた。

前シリーズ（『アメリカもおいしい』）で、ユニークな個性を存分に発揮してくれた風来君については、いまさらご紹介するまでもないとは思うものの、新しく稿を起すに当たっての、手続きとして書いておく。

主として音楽関係のメディアで、コーディネーターをつとめている三十七、八歳になるはずの中年男なんだけれど、小柄で、童顔なので十歳ぐらい若く見える。この年で、独身。大学を出たあと、ヨーロッパを中心に七年間も放浪生活を続け、いまの仕事についてからも世界中をとび歩いていたために、ヨメさんをもらう暇もなかったらしい。いまだに六畳一間のアパート暮しを続けていて、月収の七割を、CDと本代に使っているという大変な勉強家で、趣味人で、年をとったら、第二の植草甚一になりそうな男である。

前シリーズは、その風来君と、風来君のスポンサー筋に当たる紳氏（音楽会社の代表取締役）との三人旅だった。今回も三人旅である。ただし、今回、紳氏はいない。紳氏に代って、火木氏がいる。紳氏の会社で副社長の椅子にすわっているS氏のことである。

紳氏と同じく、親会社の某民放テレビ局で人気番組を多く手がけた元プロデューサーで、年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のころは、私より五つ六つ下だと思われる。白いものがまじりはじめた短いヘアスタイルと、ふっくらとした丸顔に、メタルフレームのメガネがよくお似合いの熟年紳士なんだけれど、だからといって二代目「紳氏」では能がなさすぎるし、だいいちまぎらわしい。

おだやかで控えめなSさんは、いつもにこにこ笑みをうかべているだけで、極端に口数が少ない。ほとんど沈黙の人である。だから「沈氏」もしくは「黙氏」としようかと思ったが、「沈氏」「黙氏」では中国の人かと思われかねない。寡黙の人であるからして、仮りの名を「火木氏」とお呼びする。

風来君と、二代目紳氏である火木氏との三人旅とくれば、目的はいうまでもない。音楽会社のカレンダーのための、音楽散歩シリーズ、パリ編（『旅券は俳句』）、ウィーン編、アメリカ編（『アメリカもおいしい』を改題『ラプソディー・イン・アメリカ』）に続くイタリア音楽散歩というわけである。オペラ、クラシック、カンツォーネから映画音楽まで、ゆかりの場面や建物にはこと欠かない。各地をまわって、気のむくままにスケッチをしてくればいい。

もちろん、俳句も詠む。

前シリーズで、ぼくも作ります、といっていた風来君だが、最初の滞在地ニューオーリンズで牡蠣を食いながら、「牡蠣食へばチャイム鳴るなりターミナル」というしょうもないパロディ句を披露したあと、アメリカ周遊中、二句ぐらいしか詠まなかった。

「風来君――」

「なんです」

「今度こそ、しっかり俳句を作らないか」
「よいですよ」
あ、そうそう、「よいですよ」「よいですね」というのが風来君の言葉ぐせで、このシリーズでも、たびたびとびだすと思われるので、よろしく。
「火木さんも——」
「ええ」
「句をお作りになりませんか」
「とてもとても」
手をひらひらさせて、あとはにこにこ笑っている。
スケッチブックと歳時記と文庫本サイズの無地のメモ帳（特注品）といういつもの所持品のほかに、今回は、二冊の文庫本を携行している。
一冊は『米欧回覧実記（四）』（久米邦武編・田中彰校注／岩波文庫、一九八〇年刊）。
岩倉具視を特命全権大使とする明治四年（一八七一）の岩倉使節団一行五十人の見聞を克明に伝える公式記録全百巻のうち、第六十一巻から第八十一巻までの「欧羅巴（ヨーロッパ）大洲ノ部 中」を収めたぶんで、この中で、イタリア各地の様子が詳述されている。
もう一冊は『紙上世界漫画漫遊』（岡本一平／旺文社文庫、一九八三年刊）。
大正十年（一九二一）に世界一周の旅に出た漫画家岡本一平（かの子の夫、太郎の父）が、画信のかたちで朝日新聞に連載した全百六十七編にのぼるマンガ入り印象記である。

どちらも十年以上前に出た文庫で、いまでは手に入りにくい。二冊とも読了ずみで、章によっては再読三読している本だが、これをガイドブック代りに携行して旅行したらおもしろかろうと前々から思いながら、いざ出掛ける段になると忘れていた。今回は、たまたま覚えていたので、二冊ともポケットに入れて持ち歩いている。

百二十余年前と、七十余年前の旅行記と、自分の旅とを較べてみようとか、先人の足跡をたどって検証してみようとか、そんな意図はまったくない。まあ、旅の気付けぐすり、といったところである。

ほんの一例だが、さっきの「ナポリを見て死ね」も、百二十年前の岩倉『回覧実記』に、ちゃんと出ている。

〈以国人ノ諺ニ、那不児ヲ一覧シタル後ニ死ナント謂フトナリ、以テ其名勝ノ地タルヲ知ヘシ〉

それがどうしたというようなことではない。ああそうか、という程度のことである。

ナポリはまだ先の話だが、とりあえずここローマについての、こんな一行もある。

〈此府ノ街衢ハ、多ク狭隘不規則ニテ、掃除至ラス、飛塵目ヲ昧ス〉

「うふふ、〝掃除至ラズ〟っていうのがよいですね」

風来君が、その件りを読み下して、感想を口にした。

「さっき一時間ぐらい、このへんを散歩してきたんですが、どの路地もごみだらけでした。時間が早いせいなんでしょうけど」

いま、午前九時五十分。朝食は勝手にすませて、ついいましがたロビーに集合したところだが、もう散歩をしてきたとは、相変らずまめな男である。

今日と明日は、ローマ在住のH氏がガイド役をつとめてくれることになっている。昨夜も空港に迎えに来てくれたので、初対面はすんでいる。

風来君と同年代だと思われるH氏は、学生時代に格安バックツアーでヨーロッパを周遊中、イタリアがばかに気に入って、帰る気がしなくなって、そのままローマに住みついて十五年、コルシカ生れのイタリア女性と結婚したというご仁である。その熱烈なイタリア愛にちなんで、仮りの名を「伊太氏」とお呼びする。

伊太氏は、日本からやってくるメディアのコーディネーター兼通訳をしているフリーランサーだが、ここ何年間かは、紳氏と火木氏の親会社であるテレビ局が取り組んでいる〈システィナ礼拝堂壁画修復〉プロジェクトにもっぱらかかわってきた。当然のことながら、システィナ礼拝堂は、顔パスである。

ミケランジェロの大作『最後の審判』の修復が、いま仕上げの段階にさしかかっているところで、カバーに覆われている内側に組まれた足場の上まで、伊太氏が案内してくれる手はずになっています、と東京を発つ前に火木氏から聞いている。願ってもないことである。

「おはようございます」

約束の十時かっきりに伊太氏が現われて、挨拶もそこそこに、さあまいりましょう、といった。

千載一遇夏立つ旅の予感かな　　滋酔郎

2

顔写真入りの通行証を首からぶらさげた伊太氏が、ヴァチカン宮殿入口に近い石畳の空き地に車を止め、守衛の男に流暢なイタリア語で何か話しかけると、向こうも、やあ、調子はどう、というような感じのことを口にしてから、われわれのほうを見て、通れ、というふうに手を振った。

「先生は、ヴァチカン美術館、何度も来ておられるんでしょ」

入口の案内カウンターの女性にも親しげにひと声かけた伊太氏が、そういって先に立った。

「ええ、三回来てます」

「それじゃ、もうよくご存知ですよね」

「いや、それがいつもかけ足だし、見るところは決まっているし、何度来ても、全体がつかめない」

サン・ピエトロ大寺院に隣接して長大に延びるヴァチカン美術館のスケールと、複雑な構造は、実際、二度や三度、ちょっとのぞいたぐらいではわからない。ガイドブックのたぐいを読むと、総面積五万五千平方メートル（約一万七千坪）、ローマ法王の住居のほかに、千四百もの

部屋、広間、回廊、礼拝堂、大小二十の中庭を備えるヴァチカン宮殿の中にある、と書いてあるけれど、「中にある」というより、宮殿じゅうが美術館・博物館の集合体になっていて、それらをひっくるめた総称が「ヴァチカン美術館」なのだから、イメージが結びにくい。

『回覧実記』にもこうある。

〈是ヨリ教皇ノ宝庫ニ入ル、即チ、「ワチガン」宮殿ナリ、其広キコト、一日二日ノ視尽ス所ニアラス、(略)室ニイレハ、画績爛然トシテ、綺縟目ヲ輝カス、(略)是ヨリ長廊左右ニ分レ、其長キコト、殆ト目力モ及ハサラントス、(略)廊ノ左右ニ列スル、名画、古器、珍宝多ク、且視テ且進ム〉

長い長い廊下をたどって、「且視」る余裕もなく、突き当たりのシスティナ礼拝堂に直行した。

奥行四〇・二三メートル、幅一三・四一メートル、高さ二〇・七メートルの長方形の礼拝堂は、観光客であふれんばかりだった。パンフレットやガイドブックを手に手に、みんな高い天井を見上げている。「天地創造」をえがいたミケランジェロの天井画(一五〇八―一二)は、四年前にすでに修復をおえているんだそうだが、正面祭壇の大壁画『最後の審判』(一五三六―四一)は、巨大な緞帳にとざされていて、下から見ることはできない。

「どうぞ、こちらです」

勝手知ったるという感じで、伊太氏が緞帳の向こう側に導いてくれた。

ビルの工事現場か、劇場の奈落を思わせる雑然とした小空間に、むきだしのエレベーターが

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com